
ごめんなさいの気持ち (CLANNAD)

如月奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんなさいの気持ち（CLANNAD）

【Nコード】

N0507BA

【作者名】

如月奏

【あらすじ】

友だちと公園で野球をしていたばくたち。でも、突然雨が降り出して……。

Part 1 (前書き)

本作は「CLANNAD」の二次創作です。ゲーム版のあるエピソードを基にして執筆しているので、アニメしか見たことがない方はネタバレにご注意ください。

Part 1

友だちと公園で野球をした、その帰り道のことだった。一緒に連れてきていたペットの子犬の姿が見えなくなってしまったんだ。

空が暗くなってきた、雨まで降り始めた。だから、ぼくは急いで家まで走り出したんだ。でも、それが全ての原因だった。一応、近所の野球チームでは一番を任されているし、ぼくは足が速い方だと思う。だから、子犬はぼくの足についてくることができなかったんだ。気づいた時には、もう遅かった。

「おーい、どこにいったんだよー」

ぼくは大きな声を張り上げながら、もと来た道を引き返した。きつとすぐ近くにいるはずだ。そう信じて、引き返した。でも、子犬はどこにもいなかった。そのまま歩いていると、近所の高校の生徒たちと何度かすれ違って、ぼくは高校の近くまで戻ってきたことに気づいた。もうどうしていいか分からなくなってしまっていた。

そんな時だった。

「どうしたんですか？」

女の子の声が聞こえたんだ。ぼくは声のする方を振り向いた。背はぼくより少し上ぐらい。でも、見上げる程の高さではなかった。

「……」

ぼくは何も言わずに、ただそのお姉ちゃんの目を見つめた。心配そうな表情を浮かべているお姉ちゃんは、傘もささずに立っていた。もうびしょ濡れだった。

「あ……これ、使いますか？」

お姉ちゃんはそう言つと、鞆から折りたたみの傘を取り出し、ぼくに差し出してくれた。

「持っていたのに、さすの忘れてました。えへへ……」

お姉ちゃんはちよつとだけ悲しそうに笑った。ぼくはどう返事したらいいか、分からなかった。だから、そのまま黙っていた。

「え、えつと……傘がなくて困っているのではないのですか？」

戸惑いながら言うお姉ちゃん。気づいた時には、ぼくは静かに頷いていた。

「ぼくのペットの犬がいなくなっちゃったの。どこにいるか分からなくて、探して回っていたんだけど……」

「……そうでしたか……」

お姉ちゃんはそう言うつと、ぼくに傘をぐいと押し付けて、優しく笑った。

「探しましょう。近くにいますよね」

「えつと……たぶん……」

ここで、自分で探すよと言えばよかった。でも、結局ぼくはお姉ちゃんの優しさにすがってしまった。

「お願い」

「はい！」

お姉ちゃんの元気な声が、胸を少しだけチクチクした。それからしばらく二人で校門の近くを探して回ったけれども、やっぱり見つけることができなかった。すると、お姉ちゃんはぼくの一步前に出て、

「もしかしたら、もつと遠くまで行ってるのかもしれない。探してくるので、このあたりを引き続き探していてください」

と言うと、そのまま走って行ってしまった。傘はぼくの手元にあるままなのに。

それからぼくは、お姉ちゃんに言われた通り、校門からあまり離れないようにしながら、子犬の名前を呼んだ。でも、聞こえるのは雨の音だけ。少し前からさらに雨脚が強くなってきたような気さえる。ぼくは途方に暮れてしまい、お姉ちゃんが貸してくれた傘をさしたまま、校門の近くでしゃがみ込んでしまった。すると、一人の男の子がぼくの前を走っていくのが見えた。たぶん、お姉ちゃんと同じ高校の制服だ。でも、まるで周りのものが何も見えていないかのような、そんな感じだった。

誰かを探しているんだろうか。それはぼくだって同じ。早く見つけ出してあげないと。ぼくはまた立ち上がって、近くをウロウロし始めた。

またしばらくして、背後に足音が聞こえた。

「お前が探してるのはこれか？」

先ほどのお兄ちゃんだった。その両手には、びしょ濡れになった子犬が一匹。探していたぼくの子犬だった。

「あ……」

お兄ちゃんはぼくの手子犬を持たせてくれた。ぼくは子犬をしっかりと抱きながら、

「よかった。どこにいたの」

と聞いた。お兄ちゃんは無愛想な表情を浮かべながら、向こう側の塀のあたりを指さした。そして、そのまま歩き始めたんだ。

「あ、待つて」

ぼくはそのお兄ちゃんを呼び止めた。まだお姉ちゃんが戻ってきていない。そのことが気がかりだった。

でも、彼はそのまま歩みを止めなかった。ぼくは構わず口を開いた。

「お姉ちゃん知らない？」

すると、お兄ちゃんは足を止めた。そして、すぐに振り返って、ぼくの瞳をじっと見つめた。

「誰のことだ」

「お姉ちゃん。こいつ探すの、手伝ってくれてるの」

「お前の姉貴か？」

ぼくは首を振った。

「知らない人。でも、一緒に探してくれるって……」

「制服は着ていたか」

お兄ちゃんはぼくの方に少しだけ寄って聞いた。なんだかちょっと怖そうな人だったから思わずこう言ってしまった。

「う、うん」

「どっちに行った？」

「うーん……」

そういえばどこまで探しに行っているのだろう。

「えっと……わ、分からない……」

ぼくが指さすと、お兄ちゃんは

「そうか……」

とだけ言っで、すぐそばまで来て、ぼくの頭の上にぼんと手を置いた。

「お前は先に帰ってる。このままだとお前もそいつも風邪をひく」
「……」

ぼくが黙っていると、お兄ちゃんは

「礼なら俺が伝えておく。だから、さっさと帰れ。……たぶん、お前が風邪ひいたら、あいつもっと心配するだろうから」

と言っで、ぼくの背中を押した。

「え、えっと……う、うん……」

結局ぼくは、お兄ちゃんの言葉に従って、家まで戻った。本当にそれでよかったんだろうか。もし、お兄ちゃんがお姉ちゃんを見つけることができなかったら……。絶え間なく聞こえ続ける雨音が、ぼくを不安にさせた。

そして、ぼくはまた家を飛び出した。お母さんが

「どこに行くの！」

と言っのも聞かずに、飛び出した。お姉ちゃんが貸してくれた傘を片手に、ただがむしやらに走った。自慢だったはずの足が、今はすごく遅いような気がした。でも、ただ走るしかなかったんだ。

校門の前に着くと、お姉ちゃんがいた。びしょ濡れになりながらも、懸命に探してくれていたんだと思う。お姉ちゃん表情には疲れが見て取れた。

「あ、お前」

お兄ちゃんの声には答えず、走ってお姉ちゃんのそばに寄った。

「ごめん……」

「いいんですよ」

お姉ちゃんはそう言って、ぼくの頭を撫でてくれた。

「それより、子犬さんは元気ですか？ 風邪とかひいてないですか」

「う、うん……それより……」

お姉ちゃんこそ大丈夫？ そう言おうとした。でも、それはお兄ちゃんが口を塞いでしまったので、お姉ちゃんには届かなかった。

「こ、これ、返すよ」

ぼくはお兄ちゃんの手をのけると、お姉ちゃんの手には傘を握らせてあげた。

「わざわざありがとうございます……」

お姉ちゃんはそう言って、にっこりと笑った。少しだけ顔が赤い。ひよっとして……。

「さあ、お前はさっさと帰れ。渡すものも渡しただろ」

「え、えっと……う、うん……」

お兄ちゃんに促されるようにぼくは頷いた。そして……。

「ありがとう、お姉ちゃん……」

そう言って、ぼくは駆け出した。どうしよう……どうしたらいいんだろう。お姉ちゃんにすごく悪いことをしちゃった。罪悪感だけが、ぼくの心の中に広がっていた。

Part 1（後書き）

Part 3まであります。主人公の男の子は小学生ですが、読みやすさのため、地の文では漢字で記しています。

ぶつちやけ、こんな重い話じゃないよという方もいらっしゃるかもしれませんが、一応本作ではこんな感じで進めていきます。

次の投稿は1月9日ぐらいを目標にしています。

Part 2

家の前まで戻ってくると、傘をさしてあたりをキヨロキヨロ見回している姉貴の姿があった。今日も吹奏楽部の練習が遅くまであつて、ちょうど先ほど帰ったばかりなんだろうか。まだ中学校の制服を着たままだった。

「あ……」

姉貴はぼくを見つけると、声を漏らした。

「……どこ……行っていたの？」

「えっと……ちょっと忘れ物があつて……」

ぼくは嘘をついた。でも、姉貴には見ぬかれていたようだった。
「何を隠しているの？」

丸い瞳は、ぼくの目を捉えてずっとそのまま。ぼくもそのまま姉貴の目を見つめ続けたけれども、結局ぼくの方が折れてしまった。

「あのね……」

それからぼくは、今日あったことを洗いざらいに話した。子犬とはぐれてしまって、探して回ったこと。見知らぬお姉ちゃんに探すのを手伝ってもらったこと。結局子犬は通りすがりのお兄ちゃんが見つけてくれたこと。お兄ちゃんに促されて、ぼくはお姉ちゃんが戻ってくるのも待たずに帰ってきてしまったこと。そして……。

「なるほど……それで、さっきはその子と会ってきたわけね」

「う、うん……。でも、もう一度会って、ちゃんと謝りたい。ぼくが探してもらったのをお願いしたのに……それなのに、勝手に帰ってしまったんだよ……」

「……」

姉貴はぼくを家の中にいれながら、タオルで自分の髪を拭いた。

「あんたの気持ちは分かったわ。でも、また会える保証はあるの？ まさか校門前で待ち伏せとか？」

「しないしない。……でも、考えてみればそうだよなあ……」

姉貴の言うことはもつともだった。ぼくがお姉ちゃんについて知っている情報はただ一つ。あの高校の一生徒であるということだけなのだから。

「……まあ、大して大きな町じゃないんだし、偶然また出会えるかもしれないけど。その時まで……今の気持ちを忘れないようにね」「う、うん……分かった……絶対に忘れないよ」

姉貴は小さく頷いて、ぼくの頭を撫でてくれた。

「さっさと着替えてしまいなさい。そんなびしょ濡れだと、あんたも風邪引いちゃうわよ」

「分かった」

外はまだ雨音が聞こえ続けていたけれども、先ほどまでより少しだけ小さくなった気がした。

翌日は、昨日の大降りが嘘のように、心地よく晴れていた。ぼくはまたお姉ちゃんに出会えるのではないかと淡い期待を抱きつつ、町に駆けていった。道の隅にできている水たまりを避けながら、ぼくは昨日走った道をまた行く。

しばらくして、ぼくは角のところで誰かと頭をぶつけてしまった。強烈な痛みとともに、ぼくは後方に飛ばされた。相手もまた同じようだった。

「イタタ……」

頭をさすりながら前を見ると、女の人が一人いた。年齢は分からないが、かなり若そうな感じだ。そして……。

昨日のお姉ちゃんの面影があった。

「ごめんなさい！　だ、大丈夫ですか？」

その女の方は、ぼくの前に手を差し出していた。ぼくはその手を掴みながら答えた。

「うん、大丈夫」

その矢先に、女の人の後方から、大量のパンを加えて叫びながら走ってくる変質者が現れた。

「うわ……もしかして、追われている……感じて……すか」

よく見ると、女の人の中には薄っすらと涙が浮かんでいた。これかなりの緊急事態なのではないだろうか。ぼくは女の人の手を引いて走り始めた。しかし、女の人はその場から動こうとしなかった。「はあはあ……今日はいつになく足が速い……」

「また……取り乱してしまいましたね……」

パンを飲み込んで喉に詰まらせかけている男の人の背中をさすりながら、女の人にはぼくの方を向いた。

「えっと……その人は……」

ぼくはためらいながらも尋ねてみた。すると、あまりにも意外な答えが返ってきた。

「わたしの夫の秋生さんです」

「え……ええええええ！」

二重の意味で驚かされた。まず夫がいたということが一つ。そして、雰囲気的に真逆な感じの人が夫だったということがもう一つ。

「ふう……危うくこのまま窒息死するところだった……」

「パンもお酒と同じです。少しずつ食べないと、ダメですよ」

味わいに関する意味か、生死に関する意味かは気にしないでおう。

「あ、あの……」

「あん？　なんだこいつは？」

「あ、えっとですね……さっきぶつかってしまったんです……」

そう言っただけで女の人にはぼくの方に向かって頭を下げた。

「ほう……そいつは迷惑かけたな。それじゃ、パンをくれてやる。店に来な」

「え？　あ……うん……」

何が何やら分からないまま、ぼくは二人のあとをついていくことになった。しばらく歩くと、「古河パン」と標識の掲げられた店の

前に辿り着いた。

「あ……」

ここで、予想外な人物と遭遇することとなった。そう、昨日子犬を見つけてくれたお兄ちゃんだ。

Part 2 (後書き)

なぜにオリキャラが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0507ba/>

ごめんなさいの気持ち（CLANNAD）

2012年1月8日21時46分発行